

俳句に熱中するも
体を病魔が襲う

言わずもがな、現代日本語の基礎
が作られたのが、わずか一〇〇年前
の明治時代のこと。そして、その基
礎を築いた立役者の一人が正岡子規
だった。

子規は慶応三年（1867）、伊予
国（愛媛県）生まれた。本名は常規。
ちよんまげが散切りになり、鹿鳴館
では舞踏会が華やかに繰り広げら
れた、まさに文明開化の時代だった。
幼いころから祖父の塾で漢学を学
び、中学に入ると自由民権運動の影
響で政治家にあこがれた子規は、明
治十六年（1883）、叔父を頼って
上京。翌年十八歳で帝国（東京）大
学予備門に入学、そこで西洋の政治
や法律、哲学などを学び、同窓の夏
目漱石らとともに日々文学について
熱く語り合うようになった。

加えて、彼を熱中させたのが俳句
だった。貸本屋で俳句に出合った子
規は、たった一七文字の詩の中にあ
る不思議な世界に魅了され、試験勉
強もそっこのけで俳句作りに没頭し
ていくのだ。

ところが、そんな子規を病が襲っ
た。明治二十二年（1889）五月、

突然吐血した子規はその後一週間に
わたり咯血を続けたのである。病名
は肺結核。二十三歳であった。

当時、結核は「不治の病」と言わ
れた。子規は自身の状況をこう詠ん
でいる。

卵の花の散るまで啼くか子規
ホトドギスは口の中が赤い。血を
吐き続ける自分は、まさに卵の花が
散るまで鳴き続けているようだ――。

そして、ホトドギスを表す俳号とし
て「子規」と名乗ったのである。

つまり、皮肉にも結核という病が、
俳人・正岡子規を誕生させ、彼に現

墓が語る

大事

和光山興源院大龍寺

正岡子規

正岡子規が日本人に与えた影響は俳句だけではない。

我々が親しみ続けてきた野球と密接に関係ある。

ベースボールを「野球」と訳したのは教育家の中馬庚だが、
子規はそれ以前の「野球」と訳したのは教育家の中馬庚だが、
雅号を「野球」とした。

バッター＝打者、ランナー＝走者、フアボール＝四球、
ストレイト＝直球も子規の訳語だった。

子規も中馬も、こうした貢献から野球殿堂入りしている。
子規なかりせば、打者なし……。これも歴史であった。



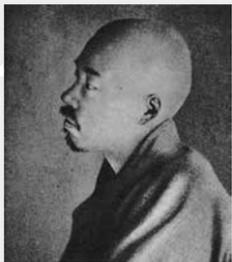
正岡子規が眠る東京北区田端の大龍寺山門。



正岡子規の墓(中)。右は母の八重の墓、左は政岡家の累代の墓。



大龍寺山門脇に建つ「子規居士墓所の碑」。



「早く
一壘に行かんか!」
うん?

「至急」のことなんかの?
「至急」のことなんかの?

「フアボール」のことだ!
「フアボール」のことだ!

なんゆうとんぞな
もし?

というのは四十歳を越えなければ天
下を動かすことができない。朝夕の
命の定まらない身で、どうして四十
歳を待つことができようか。しかし、
文学はそうでもない。四十歳を待た
ず、三十歳を待たず

子規の新たな挑戦が始まった。

明治二十五年（1892）、二十六
歳になった子規は大学を中退。日本
新聞社に入社後、文芸記者となった
彼は同社が発行する「日本」に俳句
批評を発表。決まりきった言葉しか
使わない俳句を「平句凡調」、新鮮味
がない陳腐な俳句を「月並」と一刀
両断し、旧態依然とした俳句の世界

に革新という風を吹き込んだ。

と同時に俳句の新たな道を探した
め各地を旅してまわり、そこで出
会った西洋画家たちから目に映るも
のをそのまま描くという「写生」と
いう手法を学ぶと、これを俳句にも
取り入れられないだろうか考える。

明治二十七年（1894）根岸に転
居したのは目に留まる自然を、写

生するように一つひとつを言葉にし

ていく。その中で確信した。自然に

は形式も月並みな組み合わせもない。

写生こそ、天然を映す新しい俳句を

生み出す手法だ。それが、子規が求

めていた答えだった。

だが、子規の身体には再び病魔が

忍び寄っていた。明治二十八年（1
895）に日清戦争の従軍記者とし

代日本語の礎を築く第一歩を踏み出
させるきっかけを作った、すなわち
病が正岡子規の一大事となったわけ
である。そして、「残り少ない人生を
どう生きるべきか!」を苦悩した末、
決意したのが自分の命をすべて文学
に捧げることだった。

大学を中退。
新聞記者へ

子規は当時の心境を「病牀謠語」
にこう綴っている。

政治家となるうか、文学家となる
うか、我は文学者を選ぼう。政治家

正岡子規が日本人に与えた影響は俳句だけではない。

我々が親しみ続けてきた野球と密接に関係ある。

ベースボールを「野球」と訳したのは教育家の中馬庚だが、
子規はそれ以前の「野球」と訳したのは教育家の中馬庚だが、
雅号を「野球」とした。

バッター＝打者、ランナー＝走者、フアボール＝四球、
ストレイト＝直球も子規の訳語だった。

子規も中馬も、こうした貢献から野球殿堂入りしている。
子規なかりせば、打者なし……。これも歴史であった。

て中国大陸に渡った子規は、帰りの
船で再び激しく吐血。帰国後、故郷
の松山で静養することになった。
ところが松山には、かつての同級
生・漱石が英語教師として赴任して
いた。そこで子規は漱石の下宿「愚
陀仏庵」で漱石と同居することにな
り、しばし仲間と俳句を詠む日々を
送ることになる。

日本新聞に
俳句論を連載。

だが、病は深刻に

それは東の間の休息に過ぎなかつ
た。東京に戻った子規は日本新聞に
俳句論「俳諧大要」の連載を開始。し
かし、子規をさらなる病が襲う。結
核菌が骨を冒す結核性カリエスによ
り左足から全身に激し痛みが出るよ
うになってしまったのだ。

子規は随筆にこう綴っている。

叫ぶが、泣くが、又は黙ってこら

えているかする。盛んにうめき、盛

んに叫び、盛んに泣くと、少し痛み

が減する（『黒汁一滴』より）

月日を経るたびに、子規の病状は

悪化。やがて一歩も歩けない身体に

なった子規は、自身を横たえる布団

を敷いただけの空間を「病床六尺」
と呼び、死が迫る中、この小さな世

界から新しい日本語を探すため最後
まで挑戦し続けたのである。

痛みをこらえ、庭を見つめる彼の
視線の先には草花や虫など、ただ一
度きりの見慣れた風景があった。子
規は傍らにいる高浜虚子に筆を執ら
せ、こう口述した。

余は病氣になって以来、今朝ほど
安らかな顔を持って静かにこの庭を
眺めたことはない。糸爪の葉が一枚
二枚だけひらひら動く

この文章が「ホトドギス」で発表
された五日後の明治三十五年（19
02）九月十九日、子規は永眠。三
十五年の生涯だった。

子規の墓は、北区田端の真言宗大
龍寺にある。「子規居士墓所」と記さ
れた石碑を過ぎ本堂脇の墓地に入る
と、右には母「正岡八重墓」、左に
は「正岡氏累世之墓」がある。だが、
昭和九年の三十三回忌の折、墓石の
前の墓碑銘碑は銅板で作られたもの
の何者かにより盗難に遭い、その後、
石に刻み直されたそうだ。

子規が提唱した「写生文」は、誰
にでも書ける平易な日本語として浸
透、やがて近代日本文学の礎になっ
た。子規がその偉業を成し遂げたの
は不治の病発症からわずか十年足ら
ずのことだった。